

小泉八雲の再話文学

「十六ざくら」と「うばざくら」

Saki Kikuchi

菊池 佐紀



晩年の小泉八雲



天徳寺境内にある十六日桜（松山市御幸）

よく知られた愛媛の民謡に「伊予節」がある。伊予の松山を代表する名所名物を織りこんだ、柔らかな日向くさい節回しが長く大衆に愛されてきた。三津の朝市、道後の湯、に続いて「十六日の初桜」という文句が見える。

この桜は松山市御幸の天徳寺の境内と桜ヶ谷吉平屋敷跡にあり、山桜の早咲きの品種だそう、旧正月十六日頃に花を咲かせるという、市指定の天然記念物である。

山越の龍徳寺にもあったが戦災で焼け、枯れてしまったそう。子規の句にも「うそのような十六日桜咲きにけり」とある。

この十六日桜を題材にして、小泉八雲が美しくはない怪異話を二編残していて興味深い。

イギリス人を父に、ギリシヤ人を母親として生まれ、早くから両親と生別して辛酸をなめた彼が日本という東洋の孤島に憧れたのは、新聞記者をしていた三十四歳の頃、アメリカで開催されたニューオーリンズ記念博覧会で日本から出品された見事な彫金、精巧なうるし工芸品等にすっかり魅了されたからだそうである。

その憧憬の日本にやっと足を踏み入れたのは明治二十三年、八雲は四十歳

もともと、幻想怪奇趣味の強かった八雲は以後、日本中の怪談を読み漁り、その原話を自分流にアレンジして、新しい創作として世に送り出し、世界に紹介した。つまり、八雲の「再話文学」の誕生である。

「十六ざくら」は伊予の国和氣郡（今の松山市御幸）に住む年老いた孤独な侍が、庭の桜の木が枯死寸前なのを見て嘆き、自分の残りの生を桜に与えるため、正月の十六日に桜の根元で腹を切る。老人の魂は樹にのり移って桜は甦り、正月十六日に毎年、花を咲かせた。

「うばざくら」は、伊予の国温泉郡朝美村が舞台になっている。大病にあった主家の娘のために乳母のお袖は自分が身代わりになりたいと不動明王に願をかけ、その満願の日に娘は本復する。お袖は、自分の形見に寺の境内へ桜の若木を一本寄進してくれと言いついて死ぬ。その木は翌年の二月十六日、つまりお袖の祥月命日に美しい花を咲かせた。

この二話から、自分を犠牲にして愛する者の身代わりに立つという日本人独特の精神性が窺える。八雲は日本人のこの「無償の愛」に強く心を惹かれた。



松山市御幸、桜ヶ谷吉平屋敷跡にある十六日桜。一名、「孝子桜」とも言われている。近くにロシア人墓地がある。

になっていた。出雲の松江中学の英語教師に職を得た彼はやがて士族の娘、小泉節子と結婚し、長男誕生を機に、本名のラフカディオ・ハーン改め小泉八雲と名乗り、日本に帰化することに

なる。「何もかも、誰もが小さく神秘的で、まるでおとぎ話の妖精の国だ」と喜んだこの瘦身隻眼の詩人は、節子夫人から聴いた日本の怪談話に異常な興味を抱きはじめる。



八雲の著作集（恒文社発行）

靈魂不滅を説き、一本一草にも「心」があるとする八雲のアニミズム論はこの二作に色濃く現われている。

八雲はただ怪奇趣味を満たすために怪談を手がけたのではなく、西洋文化に汚染されていない当時の日本人の素朴さと純情、人間としての誠実さをモチーフにしてヒューマンで美しい怪異話を紡ぎ上げた。形骸化した古い因縁話は八雲のあたたかい息を吹きかけられて、新しく、活き活きと甦った。

また、倫理観の強い彼は日本の公娼制度を特に忌みきらい、原話で「女郎」「妾」となっているのを「娘」「妻」と改め、自身のモラル感覚を埋めこんで、従来の人を怖がらせるだけの怪談を豊かな「心の文学」にまで昇華させた。

日本の習俗、伝統を調べ尽くし、「東の国―心」など沢山のすぐれた著述をなした業績は高く評価されるべきだったのに、八雲の晩年は不遇に終わっている。

漱石が留學先のロンドンから帰朝することによってその座を奪われ、講師を解雇されて、失意の中に明治三十七年、五十四歳で心臓発作のため急死する。

日本文化を世界に紹介した長年の功績に対し、終生の生活の保障をすべき

だったのに、国粹主義に傾いた日本は彼に報いようとはしなかった。

今日でも依然として、小泉八雲といえば、「日本人以上に日本を愛した男」というレッテルが一人歩きしているが、現実の八雲は晩年、日本と日本人に自己同一性を見出せなくなつて不信任を抱き、故国に帰りたい、とときりに言うようになっていた。たとえ帰化しても日本人には遂になり得なかった寂しい「外人」であつた。

歴史上の人物に実像と虚像の食いちがいは多いが、彼もまた、日本人の手で都合よくこしらえ上げられた虚像ではなかったか。唯物的幸福を否定し、「文明が進むにつれて人間は墮落し、やがて滅びるのだ」と予言した八雲の言葉の意味は実に重い。

きくち・さき 文芸誌「アミ」主筆。県生涯学習推進講師。九月、愛媛文芸協会主催の文章入門講座で「名文と悪文の分かれ道」のテーマで講師を務める。改めて、文章を書くことのむずかしさを痛感する。北条市在住。